

大分県文化財調査報告書 第108輯

ち づか にし 遺 跡
千 塚 西

— 県道吉野原犬飼線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2000

大分県教育委員会

ち づか にし 遺 跡
千 塚 西

— 県道吉野原犬飼線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2000

大分県教育委員会



千塚西遺跡板碑群遠景(西から)

序 文

石造文化財の宝庫とされる大分県でも、特に臼杵市・大野部には、臼杵磨崖仏をはじめ県を代表する石造文化財が数多くみられます。野津町内でも国指定重要文化財の八里合五輪塔・水地九重塔をはじめ数多くの石造文化財が残されており、野津町の文化遺産を最も特徴付けるものとして高く評価されています。

今回、大分県教育委員会では県道吉野原犬飼線道路改良工事に伴い、路線予定地内に存在する千塚西遺跡の板碑群の発掘調査を、平成10・11年度に実施しました。

現在に至るまで信仰され続けている近世板碑の発掘調査は、県下においてもきわめて類例の少ないものです。調査では板碑群の下部において集石が発見され、石造物建立の過程を理解するうえでの貴重な成果が得られました。

本書は、これらの調査成果を取録したものであり、発掘調査の意義が広く理解されるとともに、教育・学術振興と地域文化の向上のために活用されることを期待いたします。

最後に、調査に御協力いただきました関係者各位及び地元の方々に対し、深く敬意を表すとともに厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月

大分県教育委員会

教育長 田 中 恒 治

例 言

1. 本書は平成10～11年度に実施した県道吉野原犬飼線道路改良事業に伴う大分県大野郡野津町大字千塚平野所在の千塚西遺跡に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影および遺物実測・トレースは調査担当・調査員が分担して行った。
4. 原稿の執筆は、原田・江嶋・野口が分担し、編集は原田が行った。なお、文責は文末に記した。
5. 遺物は大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。

目 次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
(1) 調査の経過と概要	1
(2) 調査体制	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
3 千塚西遺跡周辺の歴史的環境	4
III 調査の成果	7
1 遺構と遺物	7
(1) 集石遺構	7
(2) 板碑	7
(3) 出土遺物	12
IV まとめ	13

挿 図 目 次

第1図 千塚西遺跡と周辺の遺跡位置図	3
第2図 野津町千塚平野周辺地形図	4
第3図 千塚西遺跡調査区位置図	5
第4図 千塚宇藤原所在宝篋印塔	5
第5図 千塚西遺跡調査区周辺地形測量図	6
第6図 千塚西遺跡4号板碑止面・側面図	7
第7図 千塚西遺跡遺構遺物検出実測図および断面図	8
第8図 千塚西遺跡板碑実測図	9
第9図 千塚西遺跡板碑拓本	10
第10図 千塚西遺跡出土遺物(1)	11
第11図 千塚西遺跡出土遺物(2)	12
第12図 千塚西遺跡出土遺物(3)	12
第13図 大野郡における紀年銘の残る板碑個体数	14
第14図 大分県大野郡域における板碑変遷概念図	15

写真図版目次

巻頭図版 千塚西遺跡板碑群遠景(西から)	
図版1 千塚西遺跡板碑群(西から)・平野石塔残欠群・平野宇藤原寺院跡遠景	16
図版2 千塚西遺跡板碑群(北から)・千塚西遺跡板碑群(西南から)・1号板碑	17
図版3 2号板碑・3号板碑・4号板碑	18
図版4 4号板碑下部集石遺構(背面から)・集石検出状態(東から)・集石検出状態(南から)	19
図版5 集石内五輪塔空風輪出土状態・完掘状態(北から)・出土遺物(1)・出土遺物(2)	20

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

大分県土木建築部から、平成10年10月に県道吉野厚犬飼線（190m）道路改良工事の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議があり、路線内に存在する千塚西遺跡の試掘確認調査の実施について検討を行った。その後、平成10年12月に試掘調査を実施し、現在、路線内の約50㎡の塚に存在する5基の石造物群について本調査を実施することにした。

本調査は、石造物の移転に伴い平成11年1～2月に石造物のみの調査を実施し、また、平成11年6月に石造物下部の遺構遺物の調査を、また、8月に石造物の拓本調査をそれぞれ実施した。

2 調査の経過

(1) 調査の経過と概要

平成10年度は平成11年1月26日より調査を実施した。まず、調査地の現地形を記録するため平板実測を行い、併せて現状の写真撮影を行った。その後、個々の石造物の実測写真撮影を行い、石造物下部確認のためのトレンチ調査を実施した。その結果、現在は4基の石造物が立てられ、また、石造物の残欠と考えられる自然石が置かれていたため、5基からなる石造物群であるものと認識されていたが、同じ並びで石造物は確認できないものの、基礎部分の集石と思われる遺構が確認でき、本来は6基からなる石造物群であったことが確認できた。このほかにも石造物が存在する塚の北東および北西に2基のトレンチを設定し、確認調査を行ったが、縄文時代前期の石器および近世陶磁器が出土したのみで明確な遺構は確認できなかった。調査終了後は次年度の本調査のため遺構の保全を図り埋め戻しを行った。

平成11年度は平成11年6月1日から実施した。塚部分に十字の土層確認のための畦を残し、掘り下げを行い、石造物下部に存在する下部構造の確認を行った。

(2) 調査体制

平成10年度

調査主体 大分県教育委員会 教育長 田中恒治
調査担当 原田昭一（県文化課主査）
調査員 上角智希（＊ 嘱託、現福岡市教育委員会）

平成11年度

調査主体 大分県教育委員会 教育長 田中恒治
調査指導 内藤克己（元野津町文化財調査委員長）
調査担当 原田昭一（県文化課主査）
調査員 衛藤麻衣（＊ 嘱託）
江嶋賢一（＊ 嘱託）
野口典良（＊ 嘱託）

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

大分県大野郡野津町は、県下最大の流域面積をもつ大野川の支流である野津川の流域に広がる町である。町内には、大分県下を南北に走る国道10号線が通り、野津町中央部に位置する野津市では臼杵市に抜ける県道臼杵野津線と三重町に抜ける竹田野津線が分かれている。

野津町中央部には地質学上有名な臼杵一八代構造線が走り、これを境に南北の地形および、それに基づく産業

の違いが歴然としてみてとれる。白杵一八代構造線の南側では石峠山(標高624m)・楯ヶ城山(610m)・冠岳(618m)など標高600m前後の峻険な山稜地が広がり、そのため杉・檜などの植林を主体とした林業が主要産業となっている。この変成岩地帯には、石灰岩地帯も含まれているため風通し孔洞をはじめとした鍾乳洞も見られる。

一方、白杵一八代構造線の北部には、阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする火山性台地が存在し、台地状には肥沃な畑地が広がり、タバコをはじめとした畑作農業の発達が見られる。

今回調査対象地となった千塚西遺跡は、野津町最北部の火山性台地上の畑地帯に広がる遺跡であり、調査対象となった石造物群は平野集落に至る道路の集落入口に位置する。

2 歴史的環境

野津町北部には阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする火山性台地が存在し、台地状には肥沃な畑地が広がることは前述したが、それゆえ、太古の人々にとっても生活するには非常に適した場所であったようで、旧石器時代から縄文・弥生・古墳時代と、各時代の遺構遺物が数多く確認されている。

旧石器時代の遺跡として、菅無田・新生・鍋田遺跡などをはじめとした諸遺跡で石器が確認されている。しかし、表採資料が多く、石器組成をはじめとした遺跡の実態は今ひとつ明らかにはできていない。

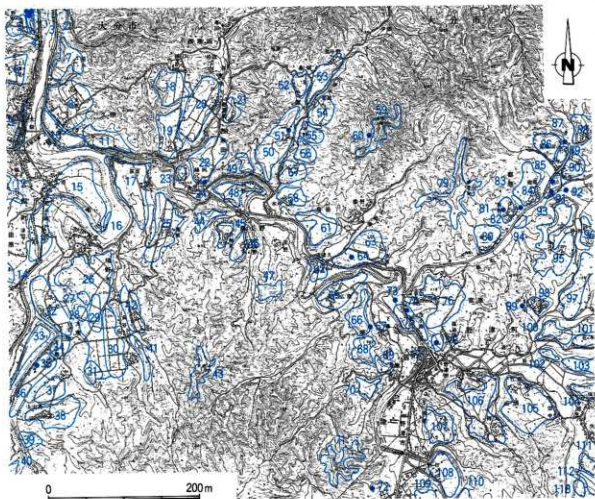
縄文時代に至ると、菅無田・新生・市場久保遺跡などにおいて、縄文時代早期の無文土器・押型文土器が出土している。このほかにも、台地上において数多くの遺跡から縄文時代早期の土器の出土が報告されており、遺跡の分布はかなりの密度になることが想定できる。同時代の明確な遺構は数少ないものの、菅無田・新生・生野遺跡においては、集石遺構がまとめて発見されており、また、菅無田遺跡では長楕円形土坑の一方に魚土が見られる炉跡群もまとめて確認されている。

縄文時代前・中期に至ると、遺跡の数が激減し、後期には再び増加傾向をたどる。後期以前の諸遺跡が台地上に立地するのに対し、後期には筒井遺跡など台地から低河岸段丘に下りた遺跡も存在する。しかし後期後半には内河野・生野・下藤遺跡をはじめ遺跡の立地は、再び台地上が主流を占めるようになり、これは晩期以降、弥生・古墳時代へと受け継がれていく。

弥生時代前・中期の遺跡は少ないが、後期に至ると激増し、菅無田遺跡において弥生時代後期の、また、下藤・日当遺跡において弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴住居群がそれぞれ検出されているが、同時代の集落が台地上にかなりの密度で存在することが想定できる。しかし、集落に伴う墓地については下藤遺跡において方形周溝墓が1基確認されているのみで古墳・横穴墓等の墳墓は確認されていない。古墳時代後期以後の遺跡は台地上において今後発見される可能性も残るが、その多くは河岸段丘上に下りた可能性が高いものと考えられる。

以後、発掘調査および遺物採集において、古代・中世の遺跡が確認できた類別は少ない。新生・内河野遺跡をはじめとした遺跡においてわずかな中世遺物が出土しているのみであるが、特に、祭祀遺構に伴い出土した内河野遺跡の小型和鏡や池原遺跡から出土した完形の青磁碗2点など注目すべき遺物も見られる。また、市場久保遺跡においては地穴で「キョウヅカ」と呼称される戦国期の方形周溝遺構も発掘調査されており、同時代の調査は緒に付いたところである。

野津町の中世については、確実に山城跡・居館跡・寺社などの存在が確認されており、特に、町内に存在する数多くの石造物は、当時の歴史を語る上で格好の資料になる。白杵市から大野郡域にかけてみられる質量とも卓越した石造文化財は関東平野のものとは並び賞され、余局的にも石造文化財の宝庫と注目されている。文永4年(1267)銘をもつ水地九重塔や弘安8年(1285)銘をもつ備後尾五輪塔をはじめとして、町内には層塔・五輪塔・板碑・宝塔・宝篋印塔・石幢・磨崖仏など多種多様な石造文化財がいたるところに分布している。また、町内の石造物を特徴づけるものとしてキリシタン墓がある。野津にキリシタンが多く存在していたことは中世末から近世初頭の宣教師の報告により紹介されているが、野津町大字原・戸上・宮原・西寒田・八合里・吉田などの地域でキリシタン墓の存在が確認されている。一般的に長方形密棟型およびカマボコ型のものをキリシタン墓と位置付けているが、型式・年代をはじめとしたキリシタン墓の実態は今後の検討課題とされよう。



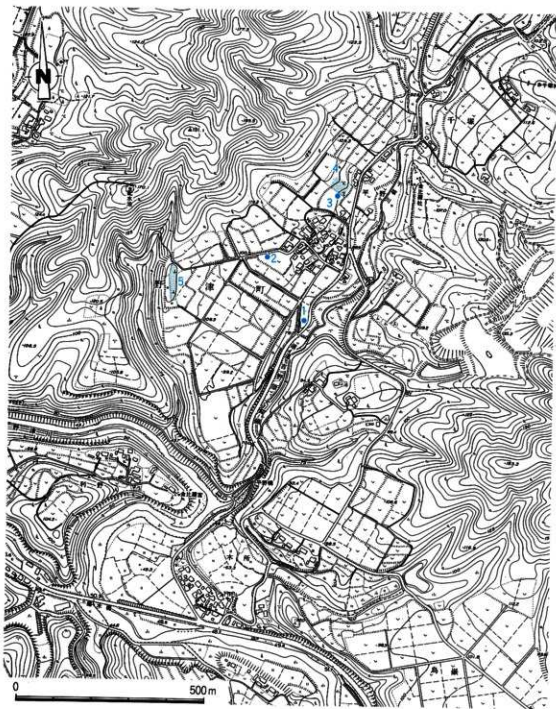
第1図 千塚西遺跡と周辺の遺跡位置図

- 1、下野熊笹社鳥居 2、下野熊笹社1号宝篋印塔 3、下野熊笹社2号宝篋印塔 4、下野遺跡 5、内河野遺跡
- 6、上津尾遺跡 7、屋水遺跡群 8、下山遺跡群 9、下夕津留遺跡 10、久原下遺跡群 11、久原東遺跡群 12、筒井ヶ城跡
- 13、津留遺跡 14、上重遺跡 15、舞田原遺跡 16、舞田横穴墓群 17、萩原遺跡群 18、細口遺跡 19、釣戸遺跡
- 20、御雲園西遺跡群 21、御雲園遺跡 22、鍋田原遺跡 23、鍋田城 24、鍋田キリシタン墓群 25、黒坂遺跡
- 26、大塚・柚野木遺跡群 27、市ノ久保遺跡 28、松山遺跡 29、高松遺跡 30、長谷遺跡 31、山神遺跡 32、高松西遺跡群
- 33、細長遺跡 34、下山奥北遺跡 35、下山奥石幢 36、佐土原遺跡 37、中ノ原遺跡 38、出口・先ノ原遺跡群
- 39、入小野遺跡 40、有田遺跡群 41、長谷川南遺跡 42、長谷川北遺跡群 43、大峠山雲 44、於無礼西遺跡
- 45、於無礼遺跡 46、内河野遺跡 47、生野遺跡 48、利野遺跡 49、利野北遺跡 50、千塚西遺跡群 51、平野宝篋印塔
- 52、桑畑遺跡 53、千塚・長小野遺跡群 54、安政遺跡群 55、平野北遺跡群 56、平野南遺跡群 57、千人塚遺跡群
- 58、木所遺跡群 59、烏岳城 60、烏岳法華塔 61、波津久北遺跡群 62、波津久遺跡群 63、牧原遺跡群 64、クルスバ遺跡
- 65、広原西遺跡群 66、広原遺跡 67、生野遺跡 68、原遺跡 69、下藤遺跡 70、荒瀬遺跡 71、法音寺城跡 72、本村地下式墳
- 73、日当無縄塔 74、日当磨崖クロス章 75、寺小路遺跡 76、日当遺跡群 77、寺小路三連板碑 78、城ヶ平館跡
- 79、筒井ヶ城跡 80、赤迫遺跡 81、妙楽寺石造物群 82、妙楽寺遺跡 83、池原石幢 84、池原遺跡 85、新生角塔婆群
- 86、菅無田遺跡 87、菅無田石幢 88、生の原遺跡 89、宗塚寺跡 90、新生遺跡 91、寺田屋敷遺跡 92、桐木石幢
- 93、新生石幢 94、筒井遺跡 95、持田西遺跡群 96、持田・東遺跡群 97、持田・南遺跡群 98、中山遺跡 99、中山板碑
- 100、花の木西遺跡 101、花の木遺跡 102、王子川・第1遺跡 103、王子川・第2遺跡群 104、塚田遺跡群
- 105、田中・竹部遺跡群 106、持丸原遺跡群 107、板屋遺跡 108、野口遺跡 109、迫遺跡群 110、下落合遺跡
- 111、水地遺跡群 112、水地・南遺跡群 113、溜水遺跡

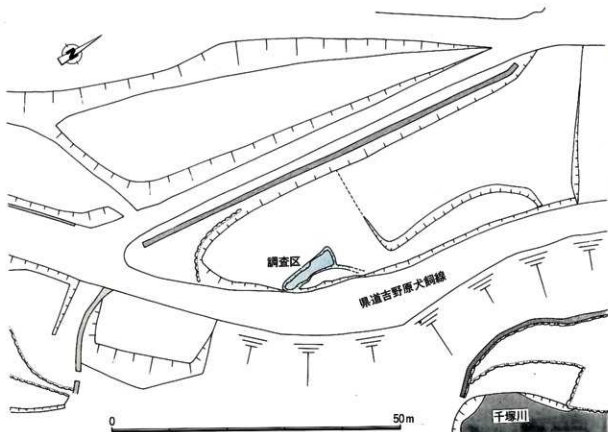
3 千塚西遺跡周辺の歴史的環境

今回、調査対象地となった千塚西遺跡内の板碑および自然石板碑群は、野津川流域の木所集落から千塚川流域谷部を抜け千塚の台地上に上る平野集落の入り口に位置する。県道吉野原大銅線と県道吉野原大銅線から平野集落に入る車道の分岐点に位置し、地元では、この板碑および自然石板碑群一帯を「トシノカミ」のシコナで呼んでいる。地元の古老によれば、昭和初期には各道路とも牛馬が通る程度の小道であったものの、その位置はほぼ踏襲されているという。

平野集落の歴史を辿れば、慶長年間以降、村内の田畑に関する文書をはじめとした諸記録が残されているが、歴史遺産の宝庫とされる野津町内においては、比較的遺跡の手薄な地域として認識されてきた感がある。しかし、平野集落内で踏査を重ねた場合、中世以降の遺構遺物が多々確認できた。



第2図 野津町千塚平野周辺地形図

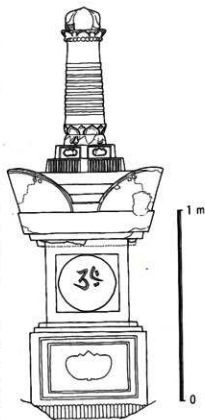


第3図 千塚西遺跡調査区位置図

以下では、今回、調査対象となった板碑群を理解するためにも、集落内に見られる中世～近世の遺構遺物を把握しておきたい。

まず、本年度調査対象地の北西方約200mの畑地内に五輪塔水輪部2基と空風輪が重ねられた残欠群がみられる（第2図2、図版1）。地元での伝承では、畑地開墾時に周囲から寄せ集められたものであるが、さほど広範囲ではなかったとされている。最下段の五輪塔水輪部は径約60cm、高さ約45cmを測り、4面にパイ（薬師）・バク（釈迦）・キリク（弥陀）・ユ（弥勒）の頭教四仏梵字種子が大きく薬研彫りされている。水輪部上部には孔が穿たれ、教典あるいは舍利納入が目的にされたものと考えられる。水輪部の大きさから推測して150～200cmの大型五輪塔であった可能性があり、その時期も、大きく薬研彫りされた梵字種子の特徴から鎌倉末～南北朝期に遡るものと考えられる。また、最上部の五輪塔空風輪は室町～戦国期のものと考えられるため、これらの石造物は時期幅をもつ石造物群であったと理解できる。

また、本年度調査対象地の北方約350m地点の字藤原に庵寺伝承地がある（第2図4、図版1）。現在は竹藪となっているが、2段の平坦地が造作され、下段平坦地南側には傾斜に沿って上幅3～4mの空堀がみられる。現在はここから若干離れた位置に県道が走るが、かつてはこの平坦地に沿って幅1m程度の道が存在していたようである。この平坦地には、中世後半の五輪塔残欠がみられ、また、空堀の外側には町指定有形文化財に指定されている宝篋印塔が残されている（第2図3）。

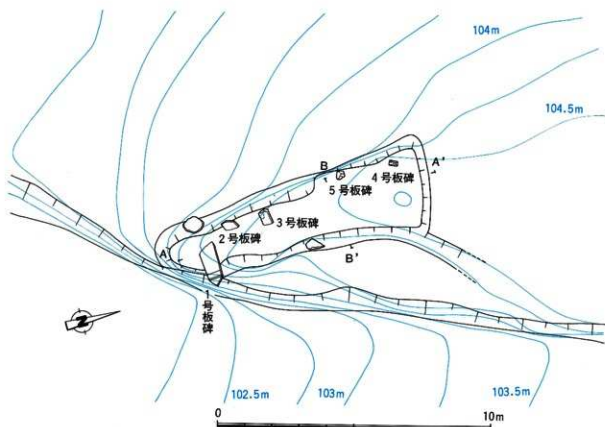


第4図 千塚字藤原所在宝篋印塔

宝篋印塔は、基礎下辺に細弁の蓮華座をもつが、基礎下部に基壇が存在したものは明らかでない。基礎側面には2重の輪郭をとり中央に格状間を浅く彫っている。基礎上部の段形は2段である。塔身部には輪郭内に月輪を設え、その中に金剛界四仏であるウーン（阿閼）・タラク（宝生）・キリーク（弥陀）・アク（不空成就）の梵字種子が各面に一体ずつ薬研彫りされているが、彫りは弱い。笠部は軒が厚く上部段形が6段で5段目には2区に分け縦蓮子を入れ、最上段の露盤は2区に分け輪郭内に格状間を浅く彫刻する。隅飾りは大きく外反し、二弧が大きく退化した形態を持ち、笠部下部段形は二段で、基礎・塔身・笠部は比較的凹凸を持たない。相輪伏鉢・請花はそれぞれ蓮弁6葉に間弁6葉をもつが、彫りが平面的で浅い。相輪は九輪であるが、輪部の厚さは一様でなく、彫りも浅く稚拙である。火炎宝珠請花は平面的で彫りの浅い蓮弁5葉と間弁5葉からなる。火炎宝珠の火炎は4本からなるが、折損している。笠部から相輪部にかけて彫刻の凹部には墨が入れている。凝灰岩製であり、形態の特徴から戦国時代のものであると考えられる（第4図）。

また、本年度調査対象地の西方約350m地点の高台にある平野集落共同墓地には戦国時代末の五輪塔が数基みられるとともに、キリシタン墓とされる方形伏墓がみられる。五輪塔は移動されているものと考えられこの墓地は近世期に至り成立した可能性が高い墓地であることがわかる。大分県内における近世墓は17世紀中葉～18世紀中葉にかけて成立しており、当墓地における在銘墓碑が18世紀中葉以降であることから、それ以前の墓である可能性が高い。

(原田昭一)



第5図 千塚西遺跡調査区周辺地形測量図

Ⅲ 調査の成果

1 遺構と遺物

(1) 集石遺構 (第7図、図版2～5)

集石及び盛り土の規模は南北約10m、東西約2.7mにわたる。形状は南北方向を長軸とするマウンド状を呈し、全体に北から南へ向かってなだらかに傾斜している。板碑は南北方向に違なって5基が現存し、これらの板碑全てが西側方向を向いていたものと考えられる。

集石は大小不揃いの礫を用いて積み上げており、石材は凝灰岩が殆どで、そのほか安山岩、僅かであるが川原石が混じる。中央に石が密集し、北側は拳大から人頭大の石が多く、南側は一抱えほどある大きな石が多い。全体として小振りの石の上に大きな石が重なる。また、特筆すべきは五輪塔の空風輪が1点検出されたことである(第7図、図版5)。他の部材は見られないため、集石の上に五輪塔があったとするよりは、集石のひとつとして他から持ち込んだものと考えられる。これらの集石は4号板碑を除いて、明確なプランや規則性は認められない。

集石上の盛り土からは近世陶磁器の破片、石器、用途不明石製品が出土した。

集石及び盛り土を撤去したその下には、板碑に伴う下部遺構は確認できなかったが、集石下のほぼ中央に土坑状の落ち込みを確認できた(第7図、図版5)。形状も不定形であり、覆土中からは近世の陶磁器の細片が出土している。従って、墓壕などではなく近世の攪乱と考えることもできる。

凝灰岩及びブーム層の地山はそれ自体が低いマウンド状を呈しており、集石及び盛り土を形成する際に地山整形がなされたものと考えられる。暗褐色の盛り土は樹根の混入が激しいながらも基本的に1層として捉えることができるため、これら集石と盛り土は地山を旧表土として、一時期に一括形成されたものと考えられる。

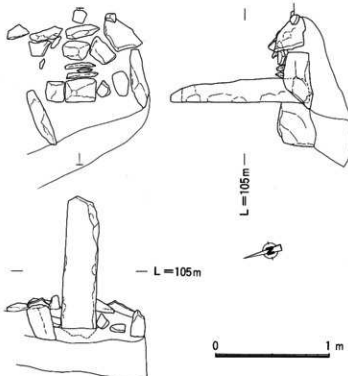
集石の北端に位置し、板碑と石組みがほぼ現状を留める形で4号板碑(第6図、図版3・4)がみられる。石組みは扁平な自然石を周囲に巡らせた約1m×1.1mの方形プランを呈し、内側には不定形の礫を詰め込む。盛り土に埋め込んだ板碑の左右には礫を配し、背後には板碑を安定させるため隙間を埋めるように扁平で薄い石を並べている。碑正面にも扁平な石を配していたものと考えられるが現在は確認できない、原因として正面の畑の拡張に伴う掘削が考えられる。

石組み及び盛り土の下には墓壕や土坑などの下部遺構は確認されなかった。(江島賢一)

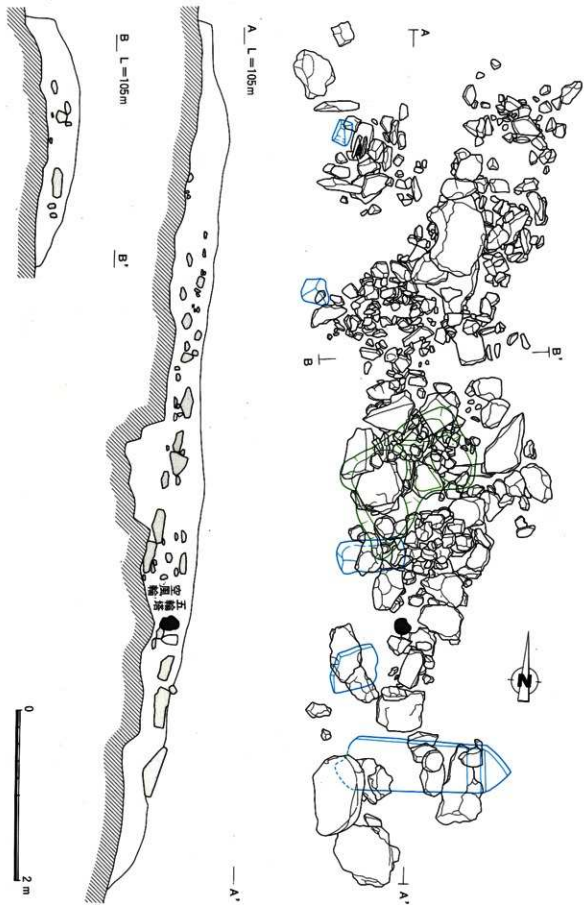
(2) 板碑 (第8・9図)

現在に残る調査区に残る石遺物は第8図の5基である。1・2は板碑、3・4・5は自然石板碑である。5については折損した残欠の可能性がある。

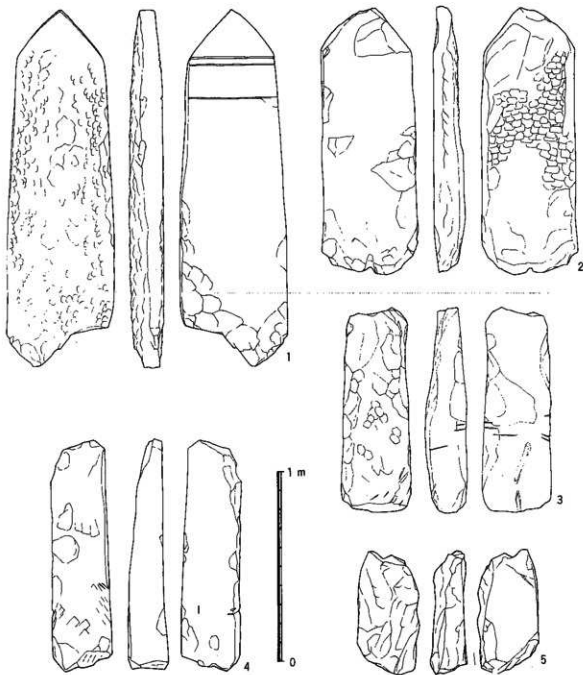
1は総高187.5cm、最大幅56.5cm、最大厚18cmを測る。正面および両側面は平滑に調整し、後面のみ粗い調整痕を残している。正面には3条の横方向の線刻が見られ、上方の2条は下方の1条と離して近接させ、正面観はこの2条の線刻部から上方を三角尖頭状に成形している。後面の調整痕は両側面から中央に向かいノミ痕が残り、中央部に向け厚く仕上げている。正面はほとんど水平に調整しているが、最下方の線刻付近から上方に向けて



第6図 千塚西遺跡4号板碑正面・側面図



第7図 千塚西遺跡遺構建物検出実測図および断面図



第8図 千塚西遺跡石板実測図

薄く屈曲させている。正面下方には粗い調整痕も残り、枘などの成形は確認出来ない。現在、前方に倒れていたため、基礎部がどの部分まで埋められていたか不明であるが、粗い調整面が残る部分を地下に埋めていたものと想定したなら、地上にのぞく高さは130~140cmを測るものと想定できる。なお、碑面には刻書・墨書などが施されていたものかもしれないが、現在は一切確認できない。

2は総高140cm、最大幅51cm、最大厚15.5cmを測る。正面および両側面は平滑に調整しているが、正面と側面との屈曲部は明確でなく頂部の成形も粗く三角尖頭状に整えられていない。また、正面・側面とも粗い調整痕を残す部分が多く、特に、正面下方の成形は粗く、枘などは確認出来ない。現在、下部47cm埋められたため93cmが地上にのぞいていた。なお、碑面には刻書・墨書などが施されていたものかもしれないが、現在は一切確認できない。

3は総高107.5cm、最大幅37cm、最大厚22cmを測る。カドの丸い扁平な直方体に近い自然石を利用したものであるが、その厚さは上部に向かうようになっていく。正面はほぼ平滑に調整し、ほとんど工具による加工痕は認められないが、背面中央に縦方向のノミ痕が、基部付近にはナメ方向のノミ痕がそれぞれ残る。なお、碑面に

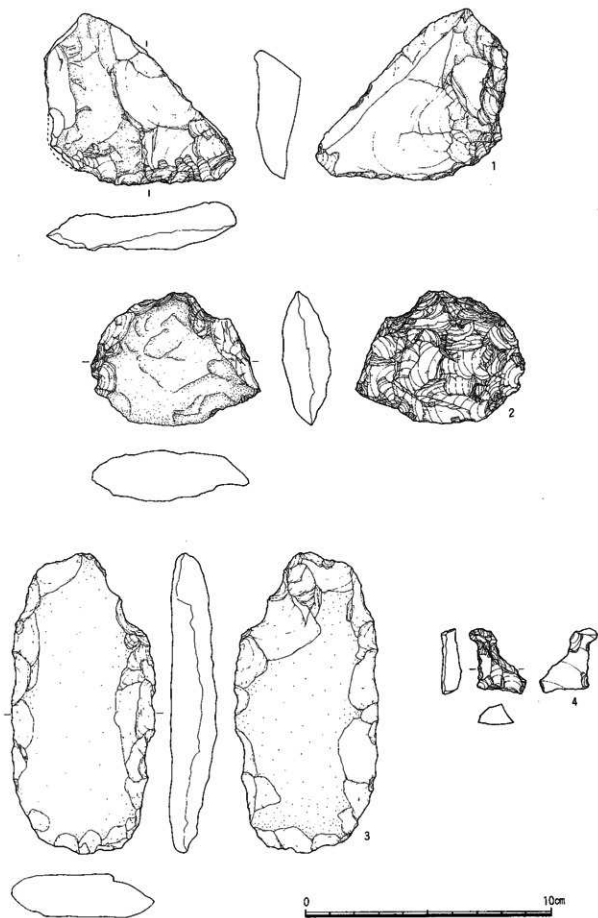


第9図 千塚西遺跡板碑拓本

は墨書であるか判然としませんが、黒色付着物が一部に残る。

4は総高122cm、最大幅31cm、最大厚21cmを測る。扁平な直方体に近い自然石を利用したものであるが、その幅・厚さとも上部に向かいうすくなっていく。正面は平滑に調整し、現在、約22cmが地下に埋められており、地上には1mのぞいていた。ほとんど工具による加工痕は認められないが、背面中央に縦方向のノミ痕が、基部付近にはナナメ方向のノミ痕がそれぞれ残る。なお、碑面には刻書・墨書など一切確認できない。

5は縦66cm、最大幅32cm、最大厚19cmを測る自然石である。広い扁平面がみられ自然石板碑が折損した残欠と



第10圖 千環西邊跡出土遺物(1)

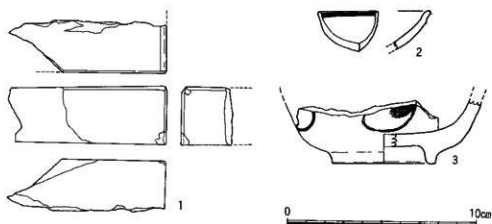
判断できる。正面と考えられる扁平面以外は、ほとんど平滑面が見られず、加工痕および刻書・墨書など一切確認できない。
(原田昭一)

(3) 出土遺物 (第10・11・12図、図版5)

出土遺物は第10・11・12図に示した。第10図1・2、第11図1・3、第12図は集石およびその盛土内から出土した。第10図3・4は調査区周辺の畑地から採集されたものである。第10図2は集石下土坑内から出土した。このほかにも集石下土坑内から近世陶磁器の破片が出土しているが、図示できる大きさではなかった。

第10図1は姫島産黒曜石を素材とした片面加工のスクレイパーである。縄文早期、または細石器文化の段階にまで遡るかもしれない。2はチャート製の打面を除去した二次加工剥片である。3は安山岩製の扁平打製石斧であり、扁平な鎌を素材とし、両面から調整剥離をほぼ全周にわたりおこなっている。縄文後期～晩期のものと思われる。4は姫島産黒曜石製の二次加工剥片であり、一側面に主要剥離面側から加工をしているが、下半部は折れている。

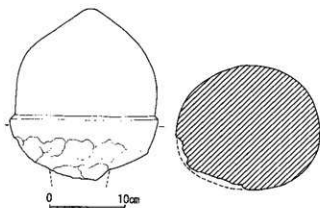
第11図1は溶結凝灰岩製の加工石材片であるが、その用途は不明である。2は近世前半期の肥前産の磁器の皿と思われる。3は18世紀前半の肥前産の陶胎染付の椀であり、外面には唐草文様があるが、内面には文様は見られない。



第11図 千塚西遺跡出土遺物(2)

第12図は集石麓上部から出土した凝灰岩製の五輪塔空風輪である。空輪は最大径を中位から下位にもち、くびれ部に締まりがなく、風輪境界部より直線的に上方に立ち上がり、尖頭状に終わる。風輪中下部は風化が著しく、本来柄部を持つものであるが、ほとんど失われている。風輪側面・底面とも直線的であり、下方に屈曲部をもつ。成形は均整がとれておらず、風輪最大径が19.6cm、最小径が16.4cmと、断面楕円形を呈し、歪な形態をもつ。

(野門・原田)



第12図 千塚西遺跡出土遺物(3)

IV まとめ

今回の調査において板碑および自然石板碑下部の集石遺構下から土坑が検出され、土坑内出土の遺物が18世紀代のものであることから、18世紀代以降に建てられたものであることが明らかとなった。集石は下部に比較的小さな礫を集め、板碑の基礎を固める上部に大型のものを配していた。各板碑下部にホゾがみられないため、原位置においても同様に板碑基礎部に大型礫を集め、基礎固めとしたことが推測できる。1・2・3・5号板碑はこれら集石上にあり、4号板碑のみ周囲に扁平自然石の囲みがみられるため、1・2・3・5号板碑とは造立時期・造立主体をはじめとした背景が異なるものと考えられる。なお、3・5号板碑間は空間が広く、基礎固め状の石組みもみられるため、他にもう1基存在していたもの抜き取られてしまった可能性も残る。

さて、これらの板碑についてどのような信仰のもとに建てられたものであろうか。この板碑群一帯が「トシノカミ」と呼ばれ、盆に松明を焚く風習が残っていたのみで、その性格は不明な点が多い。板碑に刻書・墨書の銘文が存在していた可能性もあるが、現在では全く確認できないため、造立背景を板碑から読みとめることは困難である。板碑および自然石板碑については、その時期・性格を明らかにする必要がある、それゆえ、臼杵・大野郡域の石造物を概観したうえで当遺跡の石造物の位置付けを行いたい。

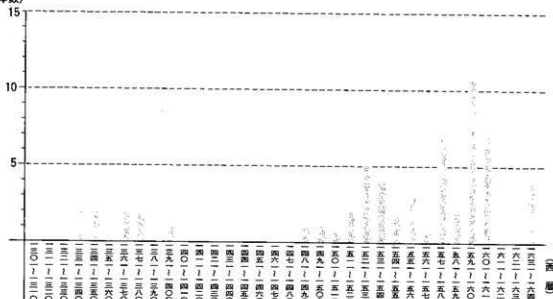
臼杵・大野郡域は国東半島一帯と同様に石造文化財の宝庫として位置付けられており、特に、臼杵石仏をはじめとした磨崖仏の数々は全国的に卓越した石造美術として高い評価を得ている。このような背景を持つ板碑は、嘉応2年(1170)の紀年銘をもつ臼杵市堂ヶ迫五輪塔をはじめとした五輪塔・層塔・宝塔などが平安時代後期から鎌倉時代中葉に出現していることに対し、現在確認されている在銘板碑は、元応元年(1319)の備後尾板碑が最古であり、他の石造物の出現と比較してやや時代が下る。また、他地域と比較しても、国東半島における板碑の出現が正応4年(1291)の護聖寺板碑であり、板碑に求められる信仰的要素は大大分県南部において後出することがわかる。

板碑分析には整形板碑と自然石板碑に分け、それぞれについて形式変化を把握した上で、板碑を理解すべきであろう。大野川流域一帯における整形板碑は鎌倉時代後期に出現して以来、近世初頭に消滅するまで、凝灰岩を原料とし、(1)小型化 (2)頭部刻頭形の簡略化 (3)顔部横2条線の簡略化 (4)顔部突出の縮小化 (5)梵字種子の小型簡略化 (6)整形の粗雑化など様々な要素で、退化の過程が形態的特徴に現れる。

元応元年(1319)の備後尾板碑では二等辺三角形形状に頭部を整形し、顔部上方に2条線を断面三角形形状に深く切り込み、顔部を突出させた梵字「ポ(淮貳観音)」の種子が大きく葉研彫りされている。このような形態的特徴は、南北朝時代を通じて継承され、この時期に急激な形式変化は見られないが、戦国時代に至ると前述した形式変化が急速に看取できるようになる。というのも大野郡域の在銘板碑を見ると、鎌倉末～南北朝時代および戦国時代後半に板碑の隆盛をみ、管見にふれる限りでは、明徳3(1390)年銘をもつ野津町風瀬板碑以後には、延徳2(1490)年銘をもつ朝地町瀬川板碑が出現するまで、約100年にもほる空白期が存在する。もちろん在銘板碑のみのデータであるため、当該期に板碑が存在しないと断定できるものではないが、きわめて少ない傾向は読みとれよう。

室町時代の空白期を経て、戦国時代の板碑は、顔部横2条線の彫りは浅くなり、最終的には浅い陰刻線の状態にまで退化してしまう。また、顔部の突出にしても浅くなり、果てには突出が認められなく、痕跡として陰刻線を引く場合や、何の表徴すら認められない場合も見られる。梵字種子についても彫りは弱く小型化への方向をたどる特徴が見られる。中世の板碑はこのような退化傾向にありながら、三重町向春庵墓家寛永16(1639)年銘板碑にいたるまで確認できる。板碑をはじめ、五輪塔・宝篋印塔・宝塔などの石造物は近世に至り、急速に消滅化への道をたどり、寺壇制度の確立とともに17世紀中葉に近世墓碑の出現にとつてかわる。大野郡域の場合、17世紀中葉に遡る近世墓碑は稀であり、紀年銘は見られないもののキリシタン墓とされる伏墓が同時代のものであると推測でき、これらの墓の出現以前に板碑が消滅したものと考えられよう。しかし、清川村後藤家板碑群は、顔部横2条線が浅い陰刻線の状態にまで退化し、顔部の突出も認められなく、痕跡として陰刻線を引くのみであり、

(個体数)



第13図 大野郡における紀年銘の残る板碑個体数

梵字種子についても彫りは弱く小型化した特徴が見られ天正一寛永期に特徴的な形態を持つ。しかし、宝永2年(1705)の紀年銘を持つ墓碑であり、周辺部に極めて若干例ながら同形式の板碑が分布しているため、局地的に中世板碑の形式は18世紀まで残ることがわかる。

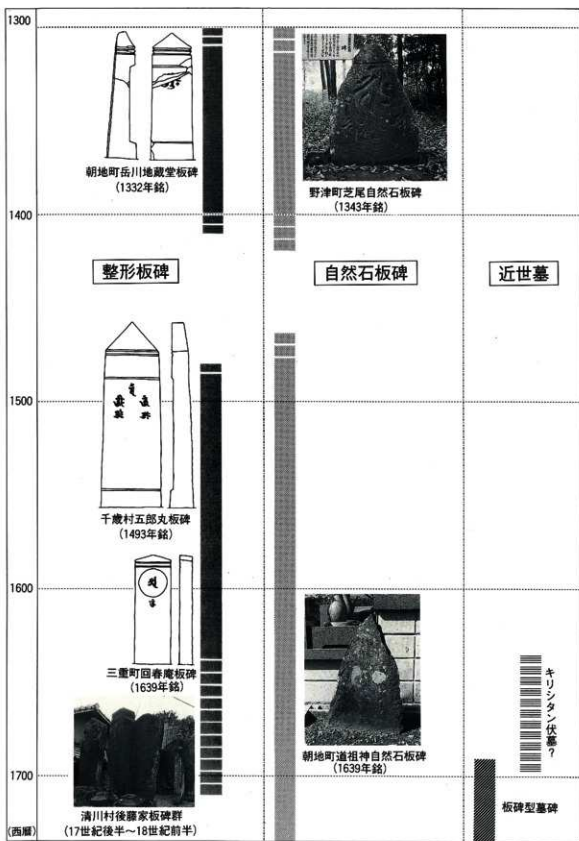
このような形式的な特徴とともに、戦国時代の板碑には庚申待供養板碑などの民間信仰的なものや墓碑を目的としたものが流行することがその銘文から読みとれる。多くの先学が指摘するように、戦国時代にいたり、板碑が日待月待供養板碑・庚申待供養板碑などの民間信仰的なものや墓碑を目的としたものへ変化していく様相が全国的に確認できる。つまり、形式変化もさることながら、その造立背景に前時代とは異なる新たな様相がみられるのである。墓碑としての板碑には、「□□禪定門」や「□□禪定尼」などの戒名が見られ、前時代の追善供養碑の伝統も継承しながら、近世墓碑に特徴的な墓標としての機能の嚆矢をここに認めることができる。

また、自然石を利用した石碑については、康永2年(1343)銘をもつ芝尾板碑を初出とし、中世の板碑の一形態として確認できる。また、近代に至るまで類例は少ないものの墓碑をはじめとした石碑として利用され続けており、特に、大野郡域では17世紀中葉以降の庚申塔は自然石を素材としたものが非常に多く確認できる。庚申信仰がうかがえる整形板碑も三重町内山蓮城寺板碑(慶長3年銘)・大野町代三五板碑(慶長6年銘)などが確認できるため、16世紀末に庚申信仰を目的とした整形板碑の成立があるものと考えられよう。しかも、慶長8年(1603)銘をもつ千歳村前田庚申塔は自然石を利用したものであり、庚申信仰に係わる石碑は当初から自然石を利用したものが多い可能性がある。しかし、紀年銘の残る自然石板碑は極めて少なく、庚申塔以外にその流行時期が確認できる資料は少ない。そのため県下を概観すれば、国東半島一帯において中世石造物消滅期にあたる戦国時代末～近世初頭に流行することが確認できる。

以上、整形板碑と自然石板碑の変遷過程を概観した場合、千塚西遺跡1号板碑は整形板碑の最終末の形式を持ったため、清川村後藤家板碑群の類例から、18世紀前葉におさまる可能性が高い。これは、板碑群下部の集石下から出土した陶磁器の時期が18世紀におさまることからも首肯できよう。また、自然石板碑も大野郡域では17世紀中葉以降の庚申塔が自然石を素材としたものが非常に多く確認できるため、1号板碑に近い時期を考えるべきであろう。しかも、当該期の自然石板碑が庚申塔として群立する形態を多くするため、千塚西遺跡が平野集落の入口の境界域に位置することもあわせて、この板碑群は庚申信仰のもと造立された可能性が高い。

今回の調査では、板碑の下部構造についての数少ない調査成果が得られた。近年の過疎化に伴い民間信仰が失われつつあるが、石造物の実態を明らかにするには、このような発掘調査による基礎資料の蓄積とともに宗教学・民俗学をはじめとした幅広い学際的な検討が必要とされよう。

(原田昭一)



第14図 大分県大野郡域における板碑変遷概念図

図版 1



千塚西遺跡板碑群 (西から)



平野石塔残欠群



平野宇藤原寺院跡遠景



千塚西遺跡板碑群 (北から)



千塚西遺跡板碑群
(西南から)



1号板碑

图版 3



2号板碑



3号板碑



4号板碑

4号板碑下部集石遺構
(背面から)



集石検出状態 (東から)



集石検出状態 (南から)





集石内五輪塔空風輪出土状態



完掘状態（北から）



出土遺物(1)



出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちづかにしいせき
書名	千塚西遺跡
副書名	県道吉野原大岡線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第108輯
編著者名	原田昭一・江嶋賢一・野口典良
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-8503 大分市府内町3-10-1 〒870-1113 大分市中判田1977 大分県文化課文化財資料室
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちづかに 千塚西遺跡	大分県 大野郡 野津町 大字千塚 平野	40	540035	33° 4'	131° 40' 30"	(1次) 990125～ 990129 (2次) 990525～ 990618	50	県道吉野原大岡線道路改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千塚西遺跡	石造物	中世・近世	板碑 集石 土坑	五輪塔空風輪 近世陶磁器 石器	

千塚西遺跡

—大分県吉野原犬飼線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

大分県文化財調査報告書 第108輯

平成12年3月31日

編集 大分県教育庁文化課（文化財資料室）

〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地

TEL (097) 597-5675

発行 大分県教育委員会

〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号

TEL (097) 536-1111

印刷 得丸デザイン印刷株式会社
